

CT・MRI 検査をお受けになった方へ

この度は当院の健診センターにて検査をお受けいただき、ありがとうございました。

今回のCT・MRI検査では、検査所見から、総合的な判定内容のみを結果表に掲載しております。

結果の見方については、以下の「CT・MRIで良く見つかる所見」をご参照ください。

なお、当院では、健診でお受けになったCT・MRI検査について、医師が画像を参照しながら直接ご説明するオプションを無料で実施しております。併設の病院への受診も可能ですので、この機会に是非ご利用ください。

CT・MRI検査について医師面談をご希望の方は、以下をご参照いただき、ご予約のうえご来院ください。

【ご予約】※お電話が繋がりにくい場合は、メールでお申し込みください。

メール kenshin-yoyaku@takanawa.icho.go.jp

※「画像検査・説明希望」とご記載ください。

※ 受診日・お名前・生年月日・お電話番号を必ずご記載ください。

お電話 03-3443-9555

JCHO 東京高輪病院
健康管理センター

CT・MRI でよく見つかる所見（1）

<頭部 MRI・MRA、頸部 MRA>

所見	説明
陳旧性梗塞・陳旧性ラクナ梗塞	過去に脳の血管が詰まった痕です。これまでまひやしびれなどの症状がなかったとしても、今後症状のある脳梗塞や脳出血、認知機能障害を発症するリスクが高いことを意味します。高血圧のある方は特に注意が必要です。
慢性虚血性変化	大脳白質の血流の低下を表します。近年、脳小血管病として扱われ、無症候性脳梗塞と同様に脳梗塞や脳出血、認知機能障害を発症するリスクが高いと報告されています。高血圧のある方は特に注意が必要です。
加齢性変化	中年以降、大脳白質に徐々に現れてくる、慢性虚血性変化や脳萎縮、脳内血管周囲腔の拡大などの変化を合わせたものです。
陳旧性出血	過去に脳内に出血した痕です。T2*強調画像などで検出される小さな「微小脳出血」を含め、高血圧性脳小血管病が原因の場合が多く、血圧のコントロールが重要です。
脳腫瘍・髄膜腫・嚢胞（脳）	いずれも脳内の腫瘍です。髄膜腫や嚢胞は良性で、基本的には経過観察の方針となりますが、年1回程度は定期的に検査を受けられることをお勧めします。
脳動脈瘤	脳動脈にできた「こぶ」で、破裂するとくも膜下出血の原因となります。破裂のリスクは大きさや形、場所により異なります。「要精密検査」の判定でなくても、初めて指摘された場合は6か月後、それ以外の方も年1回のチェックをお勧めしております。
脳動脈狭窄	脳動脈が動脈硬化など何らかの原因で狭くなった状態です。脳梗塞を防ぐため、動脈硬化のリスクファクター（高血圧症・糖尿病・脂質異常症・喫煙習慣など）のある方は、それらのコントロールが大変重要です。
動静脈奇形	脳の動脈と静脈との間に、本来あるべき毛細血管ではなく「ナイダス」と呼ばれる異常血管吻合を生じる疾患で、若い世代の脳出血の原因となります。
海綿状血管腫	古い血腫と異常に拡がった毛細血管の塊で、血管奇形の一つです。脳出血の原因となります。
もやもや病	両側内頸動脈の終末部が狭くなりやがて閉塞する原因不明の疾患で、脳卒中の原因となります。血管撮影で煙がたなびくように見えるためこのように呼ばれています。
副鼻腔炎	炎症が原因で頭蓋骨の空洞に分泌物がたまる病気で「蓄膿」とも呼ばれます。頭重感や鼻づまりなどの症状のある方は、耳鼻科受診をお勧めします。
乳突蜂巣炎	乳突蜂巣は、中耳の周囲にあるスポンジ状の骨です。急性中耳炎が悪化するとここにも炎症が及びます。耳の痛みや耳だれなどの症状のある方は、耳鼻科受診をお勧めします。

<胸部 CT>

所見	説明
陳旧性変化・慢性炎症性変化	細菌・ウイルス感染等による炎症が治癒した痕跡です。通常は心配ないですが、治癒像と言い切れない時は「要経過観察」または「要精密検査」とすることがあります。
浸潤影	肺胞内への細胞成分や液体成分が入り込んで生じる境界の不明確な陰影をいいます。肺炎、肺結核など肺感染症に見られます。
すりガラス濃度結節	文字通りすりガラスのような薄い色のぼんやりとした類円形の影です。炎症による変化と腫瘍性病変の両方が疑われます。
気管支拡張	気管支拡張症に認め、主に中層部の気管支が拡張した状態です。
肺気腫	喫煙が原因ですが、受動喫煙による影響も否定できません。現在は慢性気管支炎とともに「慢性閉塞性肺疾患（COPD）」と総称されます。
肺結節・肺小結節・腫瘤	肺野に見られる類円形の陰影です。原発性・転移性肺がんや、肺結核、非結核性抗酸菌症、陳旧化した肺炎、良性腫瘍（過誤腫など）などが疑われます。

索状影・無気肺	気管支が肺腫瘍や炎症、異物などにより閉塞し、空気の入りがなくなったために肺胞から肺胞気が抜けて部分的に肺が縮んだ状態です。肺結核のあとに起こる場合もあります。
胸膜肥厚	肺を包む胸膜が厚くなった状態です。過去の胸膜炎、肺感染症などが考えられます。
嚢胞	肺胞の壁の破壊や拡張によって、隣接する肺胞と融合した大きな袋になったものです。ときに破れて、自然気胸という病気が起こることがあります。

<腹部 CT・MRCP>

所見	説明
脂肪肝	肝臓に脂肪が過剰に蓄積した状態です。糖尿病や脂質異常症などの生活習慣病と密接な関係があります。肝硬変・肝細胞がんへ発展することがあるため、生活改善が必要です。
肝血管腫	血管から構成される肝臓の代表的な良性腫瘍です。ただし、徐々に大きくなることもありますので、経過を観察しましょう。
肝腫瘍	良性腫瘍から悪性腫瘍までいろいろな腫瘍ができる可能性があります。「要精密検査」の判定が出た場合は、良性か悪性かの鑑別のため、精密検査を受けてください。
胆石・胆泥	胆石は胆嚢内でできた結石のことで胆嚢炎や胆管炎の原因となります。また、胆泥は濃縮胆汁や感染に伴う炎症性産生物のことで、悪性腫瘍との鑑別のため精密検査が必要となる場合があります。腹痛など自覚症状がある場合も、消化器内科でご相談ください。
胆嚢腺筋腫症	胆嚢の壁が全体あるいは限局的に肥厚する良性疾患です。経過を観察しましょう。
胆嚢ポリープ	胆嚢の内側にできるポリープです。10mm 未満でかつ良性であることを示す所見が認められる場合は問題ありません。
胆管拡張	胆管（肝臓から十二指腸への胆汁の通り道）が拡張した状態です。胆管結石や腫瘍が疑われる場合には精密検査が必要です。
嚢胞（膵臓）	液体の入った袋状の病変です。小さくて単純な形の嚢胞は問題ありませんが、5mm 以上の嚢胞や複雑な形の嚢胞は経過観察や精密検査が必要です。
嚢胞（膵臓以外）	液体がたまった袋状の病変です。加齢とともに発生頻度が増加します。基本的には良性病変ですが、まれに治療が必要な場合もあります。「要精密検査」の判定が出た場合は受診してください。
膵腫瘍	膵臓の腫瘍には良性から悪性まで色々な種類の腫瘍があります。代表的な悪性腫瘍である膵がんは、ごく初期には悪性の特徴を捉えることが難しいことが多いです。指摘されたら、早急に精密検査を受けてください。
膵管拡張	消化液である膵液は膵臓で作られ、膵管を通過して十二指腸に流れます。この流れが妨げられると上流側の膵管が太くなります。原因として膵石や腫瘍が考えられますので、どんな原因で太くなっているのかを調べる必要があります。
腎臓結石・石灰化	腎臓結石は腎臓にできた結石です。尿路に嵌頓して（詰まって）水腎症をきたす場合や、腎盂全体に結石ができるサンゴ状結石などは治療が必要となる場合があります。腰痛や腹痛などの症状がある場合には、速やかに泌尿器科を受診してください。
腎盂拡張	様々な原因で尿の流れが妨げられ、腎臓の中に尿がたまった状態です。中等度から高度の場合は、結石や腫瘍が原因となっていることがあるため、精密検査が必要です。
腎血管筋脂肪腫	腎臓に発生する最も頻度の高い良性腫瘍です。腫瘍が大きい場合は出血の危険性もあり、外科的手術の適応となることがあります。
リンパ節腫大	リンパ節が腫れた状態です。感染症などの炎症や悪性疾患が原因になり得るため、精密検査が必要な場合があります。

CT・MRI でよく見つかる所見（2）

<全身 MRI>

異常がみられた箇所については「**高信号域（拡散強調画像）**」と表記されます。

病気の診断にはさらなる検査が必要になります。「紹介状」に表示された診療科への受診をお勧めいたします。

部位・臓器別 高信号となった場合に想定される主な疾患

